

## 北川民次と静岡："alter ego"とギャラリー「バツタ」

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部 公開日: 2021-09-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大原, 志麻 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00028369">https://doi.org/10.14945/00028369</a>

# 北川民次と静岡

## — “alter ego” とギャラリー「バッタ」 —

大原志麻

### 1. はじめに

2021年2月16日および3月8日に、科学研究費助成事業基盤研究(C)(19K00470)「動物表象の統合的分析—文学文化・哲学・歴史による学際的研究の基盤構築」(代表者：大原志麻)の静岡大学人文社会科学部教員のメンバーとメキシコ日本芸術文化研究常設セミナーとの共催で、司会・進行・コーディネートを筆者が、スペイン語通訳を花方寿行が担当してラテンアメリカ世界における動物表象についてのオンラインによる国際セミナーを開催した。2月16日の第1報告は国立芸術文学院造形芸術研究資料情報センター研究員テレサ・ファベラによる“Shinzaburo Takeda, painter. His Oaxaca’s fantastic animals and his peculiar aesthetic interpretation”(画家シンザブプロウ・タケダ：オアハカの素晴らしい動物たちと独特の美的解釈)、第2報告が花方寿行“Los perros y los indígenas en *Ciro Alegría, Los perros hambrientos*”(シロ・アレグリーア『飢えた犬たち』)における犬と先住民)で、メキシコと日本双方から63名の参加者があり盛会となった。

3月8日は、静岡出身の世界的な画家北川民次についてのオンライン講演に先立ち、静岡を知らないメキシコ側の参加者に対して、筆者が簡単に「北川民次と静岡」と題して解説を行った後、国立芸術文学院造形芸術研究資料情報センター常任研究員のラウラ・ゴンサレス・イ・マトゥテによる“La representación del Chapulín en la obra de Tamiji Kitagawa”(北川民次の作品におけるバッタの表象)と題したウェビナーを開催し、こちらもメキシコと日本から57名の参加者から多くの質問が寄せられ、議論が充実したものとなった。

本稿では、静岡県榛原郡五和村牛尾(現島田市牛尾)出身で、バッタのトレードマークで有名な北川民次について、静岡との関わり合いと、動物表象について考察する。またUNAMモレリア国立高等研究学校准教授有村理恵による、2

月16日のテレサ・ファベラによる第1報告“Shinzaburo Takeda, painter. His Oaxaca’s fantastic animals and his peculiar aesthetic interpretation”の翻訳及びスペイン語要約も併せて掲載する。

## 2. 北川民次と静岡

北川民次は、我が国ではメキシコ壁画運動の影響が顕著であること、『うさぎのみみはなぜながい』<sup>1</sup>などメキシコを題材にした作品で知られる。本人も「メキシコ滞在期間の30歳から45歳までが人生の正味」<sup>2</sup>であるとし、「メキシコは私の第二の故郷である。とはいっても、私の血に混じりのあるわけではない。キッスイの日本人にはちがいないが、まだお色気もつかぬ頃第一の故郷（静岡）<sup>3</sup>を追放され、流れ流れてついたのがこの国で、三十歳から四十五歳という人生の一ばん楽しかるべき十五年間をそこで過したのだから、今でも人はばからずこう言っているのである」<sup>4</sup>と述べ、メキシコ再訪問の際には「ふたたびおとずれたメキシコで（中略）見るもの聞くものが、私の心もちにびったりして、まるで生命の歯車がうまく、くいあったという感じです」<sup>5</sup>としている。このように民次といえば、まずメキシコでの活動や、美術を志すきっかけを得た東京時代そして、1914年に早稲田を中退して渡米してからの活動を論じられていることがほとんどであり、出生地の静岡は北川民次に関する論考の中でほとんど扱われることはない。

民次は1894年1月27日に静岡県榛原郡五和村牛尾の製茶業を営む地主農家に父幸次郎、母きくの間に生まれる。北川家の始祖は、徳川家康の正室である築山殿との関係も指摘される由緒ある出自であったとされるがその真偽は詳らかではない<sup>6</sup>。北川家は、苗字帯刀を許された地元の名主で、その家は、堀に囲まれた大きな屋敷だったそうで、現在でも島田市に住む人々はその名前をよく知っている<sup>7</sup>。民次の育った家庭環境は複雑で、母親は父の三人目の後妻で、民次の上に異母兄二人、異母姉一人、別の腹違いの姉と実姉が一人ずつに、実兄二人

<sup>1</sup> 北川民次『うさぎのみみはなぜながい』福音館書店、1962年。

<sup>2</sup> 北川民次『メキシコの誘惑』新潮社、1960年、165頁。

<sup>3</sup> 括弧内引用者。

<sup>4</sup> 北川民次『メキシコの誘惑』前掲書、91頁。

<sup>5</sup> 北川民次『メキシコの青春 十五年をインディアンと共に』日本図書センター、2002年、7頁。

<sup>6</sup> 泰井良「北川民次《山村初春（高草山風景）》について」『静岡県立美術館紀要』第33号、84-91頁、2017年、88頁。

<sup>7</sup> 泰井良、前掲論文、90頁。

があり、民次は末弟の五男だった。民次によれば家風は封建的で「父は一家の首長だから、いわゆるよごぎという場所にすわるが、母は召使いといっしょに板の間にすわった。ぼくは末子でも男子だから畳の上に席がきめられていたが、やっぱり母親の側がよかったので、板の間の方を好んだ」<sup>8</sup>と記している。民次は子どものころからいつも袴をつけていたというから、格式を重んじた家庭であったことが窺われる。幼児から少年時代にかけて、体は健康とはいえず、極端な虚弱児童だった。久保貞次郎は、1968年ころ雨の降る日、北川民次の案内でいまも田畑の緑にかこまれ、屋敷のまえに細い川の流れる彼の実家を訪れたことがある。「かれの家の地つづきに小山がある。その小さい丘の傾斜は、緩やかなほうだったが、子どものころ、その小山をのぼるのに、息がきれて困難したという。民次の植物に関する知識が豊富で正確だが、少年時代に植物の採集観察を続けたのは、昆虫の採集をやりたがったのに対して、それは体にこたえるから植物にしたほうがよいという家族の忠告があったからだという」<sup>9</sup>。

地元の小学校を卒業すると、静岡市にある県立静岡商業学校に入学した。かれはいたって早熟で、家にあった帝国文庫のなかの、浄瑠璃をはじめ江戸の軟文学を読みふけて、飽きることがなかったという。商業学校の上級生になったころ、まちに女義太夫がかかったので芝居小屋に聞きに出かけ、そこで教師に会い、翌日学校で叱責を受けて停学になりそうになった。同級生のひとりが

民次に同情し、同盟休校を企てたのと<sup>10</sup>、長兄の米太郎が静岡県議会議長などを歴任したお茶の功労者<sup>11</sup>でもある有力者だったので、学校側が折れて、なにごともなく済んだ。また深見鈍阿弥というところがいて、親しくつきあい、文化的な刺激をうけた<sup>12</sup>。



図1 静岡商業高校卒業時の北川民次<sup>13</sup>

<sup>8</sup> 滝本正男『北川民次に学ぶもの』黎明書房、昭和58年、34頁。

<sup>9</sup> 久保貞次郎『北川民次』叢文社、昭和59年、24頁。

<sup>10</sup> 久保貞次郎、前掲書、25頁。

<sup>11</sup> 泰井良、前掲論文、88頁。

<sup>12</sup> 久保貞次郎、前掲書、25頁。

<sup>13</sup> 2021年2月ギャラリー「バツタ」にて筆者撮影。

民次は1910年に静岡商業学校を卒業し、早稲田予科に入学する。天橋立の回船問屋の息子の西谷正治という青年と交際し、かれが中心となって活動していた文化サークルの会合に民次もたびたびでかけたり、西谷につれられ、早稲田大学の総長高田早苗の家を訪れたりした。20歳で早稲田を中退し、横浜の埠頭に兄米太郎と西谷正治に見送られ山高帽をかぶった民次は、1915年に渡米する。助手の浅川幸男によると、実家からロサンゼルスで開催された万国博覧会にお茶を売り込みに行くように言われたことによるようである<sup>14</sup>。アメリカについての民次は、当時西海岸のオレゴン州ポートランドにいた実兄の津久井育平を頼って、英語を勉強するために学校にしばらく通いながら、レストランで働き、東部に行く資金を貯める<sup>15</sup>。1919年に美術研究所であるアート・スチューデントズ・リーグ・オブ・ニューヨークに入学する。アメリカで学んだ日本人画家はフランス留学組とは対比的で、第二次世界大戦以前、「美術の本場」はパリであり、「日本の洋画壇では、東京美術学校を卒業し、パリに留学、帰国後、滞欧作を所属団体等で披露することが、画家として名を成す早道であった」。裕福なパリ留学組に対して「その一方、新興国アメリカで学んだ日本人画家に、北川民次（中略）らがいた。彼らの生活の中では労働が大きな比重を占めていた。（中略）アメリカに学んだ画家たちは、学生である前に労働者であり、生活者であった。このことは、社会の現実を厳しく見据える彼らのまなざしを育てることになる」<sup>16</sup>。1922年に民次はニューヨークをあとにし、同年中にキューバ経由でメキシコシティのサン・カルロス美術学校（メキシコ国立美術学校）に入学し、1936年にメキシコ滞在を終える。

21年ぶりに海外滞留を終えて帰国した北川民次と妻と娘は、1936年7月30日に横浜港に到着したが、祖国日本は彼らを冷たく迎えた。故郷の静岡県五和村の地主の実家を訪れたが、「預言者郷里に容れられず」<sup>17</sup>のたおのように、この家族三人を冷ややかに迎え、援助の手を差しのべるのをためらっていたようである<sup>18</sup>。民次の甥にあたる生家の当主は、民次によれば堅実な冷たい人間で、「生

---

<sup>14</sup> 島田市博物館編『第11回特別展（島田市政50周年記念）「北川民次」展』、島田市博物館、平成10年、7頁。

<sup>15</sup> 久保貞次郎『北川民次』叢文社、昭和59年、26頁。

<sup>16</sup> 土方明司「アメリカ・メキシコに学んだ北川民次」『国際交流』国際交流基金編、2003年、101頁（西郷南海子「北川民次とジョン・スローン：絵を描くことを通じた物自体のとらえなおし」『美術教育』302、16-23頁、2018年、17頁に引用）。

<sup>17</sup> 久保貞次郎、前掲書、61頁。

<sup>18</sup> 久保貞次郎、前掲書、234頁。

家の当主は立派な人物ではあるが、果たしてぼくの（遊蕩児の）いとこ<sup>19</sup>のように一生を楽しんだであろうか。彼は道徳的たらんとするために人生を冷却させ人間味を失った<sup>20</sup>と評するほど、民次にはなじめなかった。

金谷町牛尾の実家に行った後、藤枝市在住の実兄で小宮山ことの婿となった小宮山勇次宅に約二か月滞在し、絵を描いたり、梨の木の板に版画などをしたりした<sup>21</sup>。1939年には「小宮山こと像」、1950年に「小宮山勇次像」の水墨の色紙を書いている。甥である小宮山金男氏に宛てた当時の手紙が資料として、島田市博物館『「北川民次」展』図録の序文に紹介されているが、昭和11年10月10日付の手紙では、瀬戸に比べると藤枝から岡部の方の山は、変化があり面白いから画を書きたい。それも、紅葉の来ない蜜柑の色づかない頃が良い」とあり、すでに静岡の景色が絵のモチーフとして念頭にあったことが伺われる。しかしこの時期に静岡の風景をモチーフとした作品は類例がなく<sup>22</sup>、「山村初春（高草山風景）」のみである。また手紙では「僕の外国生活は、日本の生活の延長であると思って生きてきた。日本的な視方、日本的な道徳を僕はあちらで主張してきた。…幸い教育に関する仕事をして来たので、実地で其のプロパガンダにも当り、相当の効果を収めてきたつもりだ。つまり、自ら、日本通、日本精神を以って任じてきた。果たして僕の日本精神、日本道徳が正しかったかどうか、その再検討をしてみたいというのも僕が日本に帰ってきた一つの力強い理由でした。一口に云へば「日本を見る」という言葉の中の一要素です。然るに僕の考えは裏切られたらしい。一体今の日本に僕の信頼していたような精神や道徳があるのか？と僕は今反問しているので…」としており、外国生活で大切にしてきた民次の心の内なる日本と、現実の日本との隔たりに悩んでいる様子が見えがられる<sup>23</sup>。

また、タスコで野外美術学校の校長をしていた経験から、日本でも児童美術の教育者としても活動したが、「数年前、静岡県のある中学校へ講演に行った時、その歴史の先生がこう言いました。「私は新教育には不賛成だ。自由をあまり強調するので、生徒が授業時間に玉投げをしたり、角力をとったりして」<sup>24</sup>と

<sup>19</sup> 深見鈍阿弥。

<sup>20</sup> 滝本正男『北川民次に学ぶもの』黎明書房、昭和58年、69頁。

<sup>21</sup> 島田市博物館編、前掲書、8頁。

<sup>22</sup> 秦井良「北川民次《山村初春（高草山風景）》について」『静岡県立美術館紀要』第33号、88頁。

<sup>23</sup> 島田市博物館編『第11回特別展（島田市政50周年記念）「北川民次」展』、島田市博物館、平成10年、9-10頁。

<sup>24</sup> 北川民次「子どもの絵と教育—親・教師・画家・心理学者との対談—」創元社、昭和45年、84頁。

保守的な静岡の教員による批判について綴っている。

北川民次は帰国後すぐに、メキシコで考えた日本精神は現実には不在で、実際に見る日本の差が大きい点と「日本の常識」という概念の理解に苦慮している<sup>25</sup>。1973年に刊行された『バッタの哲学』の表記を、多大な影響を受けたスペイン語圏でのバッタの表象を想起させる chapulín や saltamontes、langosta でもなく、日本語のバッタをアルファベット表記した Batta としたのは、外国生活を経て俯瞰した日本の精神や常識を再検討する視点を表すためではないだろうか。

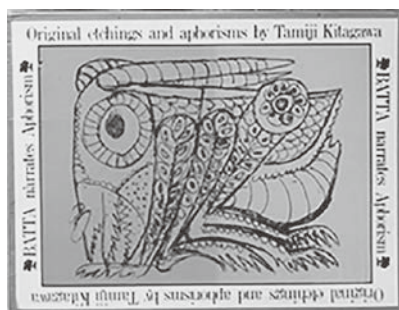


図2 北川民次『バッタの哲学』表紙<sup>26</sup>



図3 北川民次「バッタと自我像」  
(1977年、油彩画)<sup>27</sup>

1937年1月、正月を静岡で過ごした後、瀬戸市別田町の妻のてつ乃の実家に移って同居することとなり、瀬戸市を中心に絵画などの制作活動を大きく展開した。そのため北川民次の名声とその芸術のファンは静岡ではなく名古屋地方で広がっていき、その作品の多くは名古屋市美術館や瀬戸信用銀行アートギャラリーが所蔵することとなる。瀬戸信用金庫のカレンダーは1958年以来現代に至るまで北川民次の作品を採用しており、当初はカレンダー用の原画も描いていた<sup>28</sup>。このカレンダーは瀬戸市の風物詩となっている。

<sup>25</sup> 島田市博物館編『第11回特別展（島田市政50周年記念）「北川民次」展』、島田市博物館、平成10年、10頁。

<sup>26</sup> 北川民次『バッタの哲学＝アフォリズム【北川民次版画集】』UNAC TOKYO、1974年、表紙の図像。

<sup>27</sup> 島田市博物館HPより <https://www.city.shimada.shizuoka.jp/shimahaku/docs/collection-03.html> (最終閲覧日2021年5月5日) この作品は、メキシコの部族のトーテム（神秘・象徴的な自然物）である「バッタ」を自分に見立てた83歳の時の秀作である。

<sup>28</sup> 瀬戸信用金庫アートギャラリーパンフレット <https://www.setoshin.co.jp/gallery/pdf/pamphlet>。



図4 2021年瀬戸信用金庫アートギャラリーの北川民次のカレンダー<sup>29</sup>

北川民次は、壁画家のリベラ、シケイロス、タマヨと交流があり、その画風にもメキシコ壁画運動の影響が濃いが、日本でも東京五輪前後から高度経済成長期に盛んにモザイク壁画が製作された。北川民次は、「壁画は人間の精神を挑発して正しい方向に向ける原動力としての使命を果たすのに必要なメディア」であるとし、1947年に現在は取り壊されてしまい現存していないが、名古屋の丸栄百貨店の天井に約十メートル四方の壁画をテンペラで描いた。同時期に名古屋のレストランと喫茶店に一枚ずつ、瀬戸の喫茶店に一枚小さな壁画を描いたが、これらも改築で破壊された<sup>30</sup>。地元の名士だった民次は瀬戸市民から愛され、瀬戸の市民会館の壁画については、取り壊される際に保存運動が起き、移築保存されることになった。市民会館の壁画は、瀬戸蔵の壁画に保存されているタイル・モザイク壁画「採掘夫」「ロクロ場風景」「登り窯」として現在も見ることが出来る。瀬戸市立図書館には「無知と英知」「勉学」「知識の勝利」と題された陶板壁画が<sup>31</sup>、名古屋市中区のCBC会館の会館東側の外壁に高さ6.8メートル、幅16.6メートルの「平和と芸術」と題する大理石のモザイク壁画<sup>32</sup>、北川民次が原画を描いた栄のカゴメ本社ビルの光沢のあるタイルが使われている「トマトの由来」は、現在も見ることができる。北川民次は二科会会長となるなど日本での画家としての地位を築き、1989年に95歳で、瀬戸市で亡くなった。

pdf（最終閲覧日2021年5月5日）

<sup>29</sup> 2021年2月ギャラリー「バツタ」にて筆者撮影。

<sup>30</sup> 久保貞次郎『北川民次』叢文社、昭和59年、75-76頁。

<sup>31</sup> 十名直喜「瀬戸の巨匠・北川民次と近代化産業遺産—地域再生に向けた北川芸術の再評価と保存・活用の創意的試み」『名古屋学院大学論集 社会科学篇』40(1)、23-65頁、2003年、42頁。

<sup>32</sup> 十名直喜、前掲論文、42頁。



### 3. 北川民次とバッタギャラリー

静岡県内における北川民次の作品は、1977年の「自画像とバッタ」は金谷町で保管され、静岡県立美術館には1937年の「タスコの祭」と前述の「山村初春」<sup>33</sup>が所蔵されているがその数は乏しい。また島田市に「北川民次美術館」を作る計画は実現しないままとなっている。しかし北川民次は故郷と繋がりを持ち続け、民次を支えた親族もいた。異母姉松永ふかの息子で従甥の貫三は、かつては画家を志し、芹沢銈介の学友でもあった人で、小説家・村松梢風に民次の作品を見せたりもした。その貫三の一連のはからいに対する御礼として、松永ふかの家に「山村初春」が寄贈されている<sup>34</sup>。瀬戸市に住むようになって島田や藤枝を訪れており、民次のいとこであり、交流の深かった深見鈍阿弥すなわち深見仙一郎の孫である栗原東亜子が3月8日の上記オンラインセミナーで語っていたことによれば、民次が静岡での仏事に姿を現していた。



図5 栗原東亜子と北川民次<sup>35</sup>

北川民次はメキシコ生活により作り上げられたアレゴリカルで土の臭いを感じさせるメキシカン・スタイルが特色で、「日本のアウトサイダー」「異色」「異質」などと評されることが多い画家だが<sup>36</sup>、かなり高齢になってから茶畑の絵を多く残している。1975-76年には「茶畑と母子」「茶畑A」「茶畑B」などの茶畑をテーマにしたものがいくつかある。78年まで牧之原茶園を扱った茶畑風景画が続々と生まれ、毎年之二科展出品作はこのテーマで占められていた。この茶畑風景は、民次のエポックをなす作品群であり、その透徹した空気、新鮮さ、

<sup>33</sup> 秦井良、前掲論文、90頁。

<sup>34</sup> 秦井良、前掲論文、88頁。

<sup>35</sup> 2021年2月ギャラリー「バッタ」にて筆者撮影。

<sup>36</sup> 十名直喜「瀬戸の巨匠・北川民次と近代化産業遺産—地域再生に向けた北川芸術の再評価と保存・活用の創意的試み」『名古屋学院大学論集 社会科学篇』40(1)、23-65頁、2003年、23頁。

大胆さはようやくにして到達した開放された心の境地の象徴である、と評価されている<sup>37</sup>。瀬戸とメキシコを多く描いてきた民次であったが、老境には静岡の生まれ故郷の茶畑、今の金谷町五和の牧之原の風景を絵画的表現のモチーフとしている。民次は故郷への思いを文章には残さなかったが絵で表現しており、重要な記録となっている。

また、民次は愛知県に居を構えてからも、いここであり親友であった深見仙一郎を訪れ交遊していたが、昨年、その孫である島田市のくりのみ保育園の元園長栗原東亜子が、2019年まで子育て支援センターとして使われていた旧園舎を再活用して、ギャラリー「バッタ」を開館し、北川民次の作品が島田市で常設展示されることとなった。



図6、図7 くりのみ保育園旧園舎ギャラリー「バッタ」<sup>38</sup>



図8 北川民次「林の中の茶園」1976年 油彩画<sup>39</sup>

図9 旧園舎の「茶畑と母子」(1975年)をモチーフに制作されたステンドグラスの窓<sup>40</sup>

図10 バッタを描いた陶磁器<sup>41</sup>

<sup>37</sup> 久保貞次郎『北川民次』叢文社、昭和59年、220頁。

<sup>38</sup> 2021年2月ギャラリー「バッタ」にて筆者撮影。

<sup>39</sup> 島田市博物館HPより <https://www.city.shimada.shizuoka.jp/shimahaku/docs/collection-03.html> (最終閲覧日2021年5月5日)

<sup>40</sup> 2021年2月ギャラリー「バッタ」にて筆者撮影。

<sup>41</sup> 2021年2月ギャラリー「バッタ」にて筆者撮影。

バッタギャラリーには、民次が自己の象徴として描いたバッタや母子像などの絵画、陶磁器などに加え、直筆の手紙、晩年まで身に付けていた指輪、故郷のいとこに宛てて送った干支が描かれた年賀状などが展示されている。



図11 北川民次の十二支の年賀状<sup>42</sup>

#### 4. おわりに

メキシコから帰国した北川民次を迎え入れたのは名古屋と瀬戸であり、特に壁画は愛知県にしかない遺産となっている。「瀬戸といえば、北川民次、民次といえば瀬戸」<sup>43</sup>といわれたほどで、瀬戸が北川民次の「名作の故郷」<sup>44</sup>であることに議論の余地はない。とはいえ本論文で再検討したように、民次には、実際には静岡の北川家の親族の中にも直接的な関係を保っていた人物がおり、彼の芸術活動の環境作りに欠かせない支援となっていた。北川民次が著した本を概観する限り静岡への思いは文章とはなっていないが、老境にあって静岡県風景をモチーフとした多くの茶畑の絵を描いていることから、忘れえぬ故郷静岡への憧憬が感じ取れる。静岡の親戚との交流の深さがあってのことであり、ギャラリー「バッタ」が開館されたのも、重要な民次の足跡を巡る上で重要な場所であるといえる。

<sup>42</sup> 2021年2月ギャラリー「バッタ」にて筆者撮影。

<sup>43</sup> 久保貞次郎『北川民次』叢文社、1984年、233頁。

<sup>44</sup> 十名直喜、前掲論文、34頁。